

## 【学位請求論文要約】

### 1. 本論考の構成（章立て）

#### 序章

- 第一節 問題の所在
- 第二節 研究史の整理と課題の設定
- 第三節 本論考の構成
- 第四節 金原明善と金原明善研究の現在
- 第五節 浜松の地域性①自然的・社会的環境
- 第六節 浜松の地域性②文化的環境

#### 第一部 金原明善の思想と行動

##### 第一章 「金原明善の天竜川治水構想と地域社会―近世・近代移行期「名望家」の営みをめぐって―」

はじめに

- 第一節 治河協力社の設立と金原の治水構想
  - 第二節 治河協力社の経営実態
  - 第三節 金原の治水事業と天竜川沿岸地域
- むすびにかえて

##### 第二章 「金原明善の林業思想とその実践」

はじめに

- 第一節 金原による瀬尻の造林
  - 第二節 金原の林業観
  - 第三節 天城山御料林での造林、そして学校建設
- むすびにかえて

##### 第三章 「金原明善の天皇意識とその形成要因」

はじめに

- 第一節 明治初期から一〇年代における金原の天皇意識
  - 第二節 明治二〇～三〇年代における金原の天皇意識
  - 第三節 金原の天皇意識形成をうながすもの
- むすびにかえて

#### 第二部 金原明善の「偉人」化とその展開

##### 第四章 「金原明善の『偉人』化と近代日本社会―顕彰の背景とその受容―」

はじめに

- 第一節 金原明善像の展開
- 第二節 「偉人金原明善」の受容

むすびにかえて

## 第五章 「農本主義イデオロギーと「偉人」金原明善—山崎延吉による金原顕彰の歴史的意味の検討—」

はじめに

第一節 『農村自治の研究』の刊行

第二節 山崎による「偉人」金原明善の顕彰

むすびにかえて

## 第六章 「近代天皇制国家における鈴木信一の歴史的位罫—専修学校出身の実業家の思想と行動に着目して—」

はじめに

第一節 鈴木信一の人物像

第二節 専修学校と鈴木の実業思想

第三節 戦時下における鈴木の実業家としての顕彰

むすびにかえて

## 第七章 「越境する「偉人」金原明善—植民地支配における「偉人」の位置づけをめぐって」

はじめに

第一節 「天龍川の恩人 金原明善」の基礎的研究

第二節 「天龍川の恩人」における金原明善

第三節 『此の人を見よ 金原明善実録』の刊行とその時代

第四節 山田司海の朝鮮人観と帝国意識

むすびにかえて

終章

第一節 本論考の成果

第二節 今後の課題

## 2. 本論考の現代的意義

本論考は、近代日本における国家体制＝近代天皇制の支配イデオロギーについて、遠江国長上郡安間村（現在の静岡県浜松市）出身の実業家金原明善（1832年－1923年）が「偉人」として顕彰された事実を手がかりとして、近代天皇制国家におけるイデオロギーと「偉人」顕彰との関係性について明らかにするものである。

本論考において、近代天皇制を歴史的に検討する理由として、以下2点の背景がある。

1点目は、東日本大震災以後の日本における明仁天皇人気の高まりである。被災地を美智子皇后と巡り、被災者に寄り添う姿を示した明仁天皇の象徴天皇としてのパフォーマンスは、天皇に対する国民の好意的な感情を高めた。天皇制の存続を至上命題としながら、象徴天皇とはいかなる存在であるべきかを常に考え振る舞ってきた明仁天皇による「公的行為」

が国民に支持されるという現象は、戦前天皇制と本質的に連続する面を多く持つ象徴天皇制、すなわち日本における君主制の存在を社会的に認めることを意味する。ここで改めて、国民にとって天皇の存在の意味について考える必要があるといえる。

2点目は、現代日本における「戦前回帰」というべき現象の進行である。島藺進は、2012年に第二次安倍晋三内閣が発足して以降、天皇を万世一系の聖なる存在と捉えて「国体」の中心に掲げ、国家の威信を高めると同時に権威主義的な体制づくりが同内閣によって強化されていると指摘し、現代日本における宗教ナショナリズムの台頭、すなわち戦前日本にみられた天皇崇敬と神聖国家観の復活に警鐘を鳴らしている（片山杜秀・島藺進『近代天皇論——「神聖」か、「象徴」か』集英社、2017年）。この指摘に鑑みれば、かつて天皇をして「現人神」といわしめるまでに権威化し、多くの国民に戦禍をもたらした天皇崇拝による国民統合のあり方が、戦後70余年の時を経て再出現しようとしている状況にあるといえる。

以上の天皇をめぐる今日状況と踏まえて、筆者は、改めて近代日本における天皇制の歴史的位置を検討し、現代にも影響を及ぼす近代日本特有の権力支配の構造を明らかにすべきと考え、本論考を執筆した。

### 3. 本論考の要約

序章では、近代天皇制の研究史を整理したうえで、本論考の位置を明らかにした。

第一部「金原明善の思想と行動」は、三本の論文からなる。

第1章「金原明善の天竜川治水構想と地域社会」では、金原が近世後期から熱心に取り組み、特に明治以降は治河協力社という結社を設立して一層力を注いだ天竜川治水について概観した。具体的には、金原が1874年（明治7）に設立した天竜川治水のための結社である治河協力社の経営実態を検討し、金原が近世的な枠組みを超えて中央政府と結んだ新たな治水の取り組み方を採用したことの地域史的な意味を明らかにした。

第2章「金原明善の林業思想とその実践」では、金原が天竜川治水ののち取り組み始め、金原を「偉人」として顕彰する言説のなかで度々引き合いに出された林業を事例として、金原の林業への取り組みを歴史的に位置づけた。具体的には、金原が行った瀬尻・天城山両御料林における造林事業や他県での植林指導といった林業に関する取り組みを分析し、その歴史的な意味を明らかにした。

第3章「金原明善の天皇意識とその形成要因」では、天竜川の治水や林業への取り組みをはじめとする金原の活動が、如何なる意識のもとに展開されたのか、その思想的なバックボーンを検討した。具体的には、金原の天皇に対する意識と「国民」としての意識に着目し、この二つの意識が彼の実業家としての営みにどの様に関わっていたのかを分析した。

これら3本の論考を踏まえて、のちに「偉人」として顕彰される対象となる金原明善の思想と行動について明らかにした。

第二部「金原明善の「偉人」化とその展開」は4本の論考からなる。

第4章「金原明善の『偉人』化と近代日本社会」では、金原を「偉人」として扱う書物に着目し、明治中期からアジア・太平洋戦争期までのタイムスパンのなかで金原が「偉人」としてどの様に称揚・顕彰されていたのか、その見取り図を示した。そこでは金原が、立身出世主義や修養主義、戦時体制の強化に伴う「滅私奉公」の奨励など、異なる時代背景のなかで様々な文脈のもと「偉人」として顕彰されていたことを明らかにした。

第5章「農本主義イデオロギーと「偉人」金原明善」では金原と親交を持ちつつ安城農林学校校長として青年たちの指導にあたっていた農本主義者山崎延吉を分析の対象に据え、彼の農本主義思想と金原を顕彰する営みとの関係性を明らかにした。分析の結果、山崎が金原を「偉人」として顕彰した背景に、山崎が抱く「農村自治」の理想像があり、その思想は地主・小作関係を理論的に擁護するという限界を有するものであったことを指摘した。

第6章「近代天皇制国家における鈴木信一の歴史的位罫」では金原に師事し、金原亡き後も生涯浜松における林業に関わり続けた鈴木信一の思想と金原顕彰の営みとの関わりを明らかにした。具体的には、鈴木が専修学校（現専修大学）の理財科に学んで林業経済に関する思想を形成したこと、および戦時体制下の日本社会において、林業による「報国」の必要性を主張しながら金原の顕彰を、書物とラジオという二種類のメディアから行っていたことを明らかにした。

第5章および第6章の検討によって、金原を「偉人」として顕彰した担い手の意識や思想を考察し、金原が「偉人」として顕彰された背景に諸主体の個別具体的な意識が存在していた点があきらかとなった。

第7章「越境する「偉人」金原明善」では、「偉人」金原明善を素材とした新聞の連載小説が『京城日報』に掲載されていた事実を手がかりとして、植民地主義と「偉人」顕彰との関係性について考察した。そこでは、ひとりのジャーナリストに注目し、その人物がもっていた帝国意識をもあぶり出しながら、内地で書物を介し流通していた「偉人」が植民地朝鮮においても流通させられたことの歴史的意味を明らかにした。

終章では、本論考の成果と課題について論じた。

#### 4. 本論考の成果と課題

本論考では、「偉人」という存在に着目して、近代天皇制国家という時代の全体像を描くことを試みた。その結果、治水や林業への取り組みを通じて日本における近代国家建設に積極的に関与した金原明善という個人が「偉人」として顕彰され、その過程において近代天皇制におけるイデオロギー支配を下支えする言説や営みがみられるという歴史像を提示することが出来た。金原は、明治中期から昭和戦前期にかけて、様々な主体の手によって、その時々の時代的社会的背景に裏打ちされながら、立身出世や修養、総力戦体制下における「臣民」の模範（「偉人」）として顕彰され、近代天皇制国家における支配イデオロギーとして機能していたのである。また、金原を題材にした伝記小説の叙述には、近代家族における

家父長制的イデオロギーや「一君万民」のあるべき姿を読者に訴えるイデオロギーとして機能・展開したものもあった。総じて金原の「偉人」化は、様々な論調・形態のもと、近代天皇制国家における支配イデオロギーとして存在していたといえることができるのである。

こうした「偉人」金原明善を、民衆はどの様に捉えていたのであろうか。『金原明善資料集』には、金原を題材にした書物を読んで「偉人」金原を敬慕する主体の数々を見て取ることができる。また、水野定治が1950年に著した『岐阜県と金原明善翁』には、金原が岐阜県根尾谷で植林指導をしたことで同地において植林が盛んになったと述べる人々の証言が収められ、いずれも金原による植林指導によって同地で林業が盛んになったことを指摘し、金原の存在意義を強調している。

また、満蒙開拓青少年義勇軍に参加したある男性は、幼い頃から「偉人」としての金原を敬慕し、自身が満蒙開拓青少年義勇軍に入隊する際には、「偉人」金原への尊崇の念が動機にあったと述べていたことを明らかにした。その上で、金原の「偉人」顕彰が、直接的現実的な植民地暴力の具現化である満州移民の当事者の思想形成に関わっていた事実を明らかにし、金原の「偉人」化が帝国日本の一人の民衆をして植民地暴力の担い手としてしまうイデオロギーとして機能していたことを本論考では明らかにした。

最後に、今後の課題として、より精緻な金原個人の思想形成過程の解明と、東アジア史の視点から金原の「偉人」顕彰を捉え返す研究の必要性を指摘した。

以上。